

評価計画				自己評価							
項目	中期経営目標	短期経営目標	具体的な取組・方法	評価指標	目標値	達成値		達成度	評価	分析（成果と課題）	改善方策
						中間	最終				
確かな学力	確かな学力の定着と主体的・対話的で深い学びの実現	基礎的・基本的な知識・技能の定着	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童のつまずきを分析するとともに、各教科の特性を生かした指導を工夫改善し、国語科では、10の観点読み、算数科では考え方モンスターを活用することで、児童の「わかる・できる」を保障する。</li> <li>ドリルタイムを活用し、基礎的な技能の習得や復習を図る。</li> <li>児童一人一人の実態に応じた家庭学習の課題を工夫する。</li> <li>ICTを活用し、個別最適な学びを保障する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国語科・算数科の単元テストで平均点が目標値（85点）を上回った学年の割合を85%以上にする。</li> <li>三次市学力到達度検査（基礎・活用）で全国平均を上回った教科数の割合を85%以上にする。</li> </ul>	単元85%市85%	50%	67%	79%	C	各学年の単元末テストの結果の平均点をみると、算数85点以上の学年が二学年（1年、6年）、国語85点以上の学年が三学年（1年、2年、4年）であった。国語・算数の単元末テストのすべてを平均すると、85.7点で1学期と同様の結果となった。三次市学力到達度検査の校内採点の結果、3つ以上の資料から目的に応じて必要な情報を判断して効果的に用いて説明する能力に課題があることがわかった。これは、国語だけでなく、算数や理科、社会などの教科の結果からもこのことがいえる。	2学期におこなった具体物を操作する授業を取り入れたり、押さえない言葉や図などを提示して考え方を整理する算数の授業や、一度書いた自分の考えを見直して修正することができるような国語の授業を引き続きおこなってきたい。さらに、市内学力到達度検査の結果から明らかになった課題について取り組むために、国語の説明的文章の単元づくりを研究の柱に据え、全ての学年において指導方法の工夫改善を図っていきたい。
		「表現力」の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペア、グループ、一斉学習といろいろな形態で考えを伝える場を設定する。</li> <li>研究授業を中心に話し合い活動の充実のさせ方について職員で協議する。</li> <li>考えを書く、学習の振り返りを視点をもって考える時間を確保する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童アンケート「授業では、友達と話し合うなどして、自分の考えが深まったと感じる。（理由が思いついた、考えに自信が持てた、説明の仕方が分かったなど）」の項目について肯定的な評価を93%以上にする。</li> </ul>	93%	91%	90%	97	B	児童のアンケート結果をみると、肯定的な回答をした児童が72人、否定的な回答をした児童が8人ほどいる。8名のうち3名は、1学期に続いて否定的な回答をしている。2学期には各学級で積極的にペアやグループを取り入れた学習形態を取り入れた授業にも取り組んだことで、一定の成果がみられている。一方で、依然として否定的な回答をしている者もいることから、児童同士の話し合いだけでは、「理由が思いついた、考えに自信が持てた、説明の仕方が分かった」などを感じることができにくい者がいることが明らかになった。	児童同士の話し合いの場を積極的に取り入れる取組を続けながらも、児童同士の話し合いだけでは、「理由が思いついた、考えに自信が持てた、説明の仕方が分かったなど」を感じることができにくい児童に対して、ペアやグループの活動の前後に個別に声をかけ、自分と他者の考えの違いや同じ部分に注目させたり、自分自身の考えの変容に気づかせるなど、個に応じた細かい教師の手立てを講じていきたい。
豊かな心	主体的に表現しようとする児童生徒の育成	自己有用感の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>縦割り班での掃除やレク、行事などで他学年と関わる機会を充実させ、自己有用感をもつことができる取組を児童会・委員会と協力して行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>道徳アンケートで、自己有用感に肯定的な評価をする児童を90%以上にする。</li> </ul>	90%	81%	73%	81	B	児童会が主催する全校レクレーションを数回行った。異学年交流を通して、仲を深めることができた。運動会では、係の児童や応援団の児童が積極的に動き、中心となって運動会を運営することができた。	委員会や当番、日直、そうじなど、自分たちの仕事を責任をもって行き、その良さを実感させる。自分のがんばりや友達のがんばり（いい所）見つけを行い、自己有用感を高める。
		規範意識の醸成	<ul style="list-style-type: none"> <li>あいさつ、返事、学びの習慣（時間を守る）を身につけた児童を育成する。委員会活動を中心に全校に意識化を呼びかけ、児童が主体的に取り組む活動を推進する。</li> <li>児童・教職員アンケートを実施分析し、取組を考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童アンケートで、規範意識を肯定的な評価をする児童を90%以上にする。</li> </ul>	90%	93%	88%	97	B	児童の自己評価は時間を守る78%、返事94%、あいさつ94%だった。3つの項目を意識して取り組もうと1週間達成できたかどうかを振り返る期間を設けた。期間中は、守ろうと高い意識をもって生活したが、継続できるよう今後も取り組みを考えていく。学校評価アンケートより、挨拶については、約3割の方があいさつに課題が見られると回答された。	児童会の月目標に「時間を守る」ことを3学期の月目標に掲げ、全校児童で意識を高めて取り組む。自己評価と他者評価を行い、結果を児童に伝える。課題を認識させるとともに、できたことは認め自己肯定感を高めていく。学校でする挨拶を習慣化し、相手を意識したあいさつを意識させる。また、地域でのあいさつの場面を想起させ、具体的な場面でのあいさつを意識させる。
健康な体	健康の保持増進と体力の向上	生活習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>メディアコントロールウィークを設定し、自己評価する。</li> <li>給食の時間や各教科等の時間を活用して食に関する指導を行い、食に関する興味・関心を高める。食に関する情報を定期的に発信し、全教職員で食育を推進していく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>メディアに触れている時間の目標を個人で設定し、達成できた児童を80%以上にする。</li> <li>食品の名前や栄養素の働きを理解し、食べ物を好き嫌いせずに食べることができる児童を80%以上にする。</li> </ul>	メディア80%食80%	78%	76%	95	B	1・2学期ともに、メディアコントロールの自己目標を設定し、家庭の協力を得ながら進めることができた。取組期間に合わせて、事前指導や委員会活動も取り入れながら実施できた。自己決定させながら自分が食べきる量を決定して食べるように支援しているが、日々残菜が残っている傾向にある。栄養バランスの重要性について理解しているが、実際の行動と伴っていない。個人の意識を高めることや環境面の支援をしていく必要があると考える。	各家庭や児童に合ったメディア利用の目標設定ができたので、今後も家庭の協力を得ながら進める。合わせて、児童が意欲を持てるよう取組の方法を工夫していく。食時間における指導を通して、食べることは「楽しい」というきっかけを作り、食への興味関心を高めていく。また、担任と連携して食べにくさを感じる児童への個別指導を実施する。
		体力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>新体力テストの県平均、全国平均や昨年度の自己記録をもとに、自己目標を設定させる。</li> <li>体育科を中心にサーキットなどの体づくり運動に取り組む。</li> <li>朝会の時間を使って持久走やなわとび練習などをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新体力テストで、各学年8項目中4項目が県平均または全国平均を超えるようにする。</li> <li>2学期以降新体力テストで県平均または全国平均を下回った2項目を全校で実施する。</li> </ul>	4項目		4項目	100	A	新体力テストの結果（5年生）より、県平均及び全国平均値と比較し男子8項目中5項目、女子は3項目上回った。男女ともに、握力、上体起こし、長座体前屈に課題が見られた。	課題が見られた種目について、3学期体育の時間のはじめの数分間で関連する運動を行う。個人の結果を知らせ、自分の課題を認識させる。課題解決のための運動を伝えたり、調べさせたりして、継続的に取り組めるよう意識を高めさせる。
信頼される学校	地域・保護者から信頼される学校づくり	地域とともにある学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>CSの取組を進め、保育所、小学校、中学校、高等学校、地域の各種団体との連携を図る。</li> <li>学校だよりやHP等を活用した情報発信を積極的に行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保、小、中、高や地域との交流活動を通して、成長したと肯定的評価をする児童を80%以上にする。</li> <li>保護者アンケートで情報発信に係る肯定的評価を90%以上にする。</li> </ul>	交流80%情報90%	89%	89%	111	A	交流活動を通して、自分が成長したと感じられる児童が89%おり、様々な交流活動や地域連携をし、その反応が返ってくる体験を通して、自己肯定感が高まっていると考える。情報発信に関わる肯定的評価は93%となり、紙面や電子媒体で効果的に発信できている。	交流活動と「吉き舎りプログラム」をしっかりと関わらせていくことで、自己変容に気づく機会を設け、より成長を実感させていく。そのためにも、CSを推し進め、地域の教育力を有効活用し、地域に開かれた学校づくりを行っていく。その取組を情報発信することで、地域へ還元していく。
		働き方改革の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>半期ごとにアンケート等で実態を把握し、学校衛生委員会や企画委員会を中心に取組を推進する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童に向き合う時間があると実感する教職員の割合を80%以上にする。</li> </ul>	80%	92%	93%	116	A	児童に向き合う時間があると実感する教職員の割合が93%であった。目安である勤務時間外在校時間45時間以下を意識して働き方の改善を図っている姿がよく見られるようになり、全職員の月平均勤務時間外在校時間が25時間を割るようになってきている。	働き方改革の推進を通して、教職員としての専門性を高め、教育活動を充実するという目的を達成し、教職員のさらなる働き方改革の意識の醸成に努めていく。